



小田原市立曽我小学校 令和5年度 校内研究



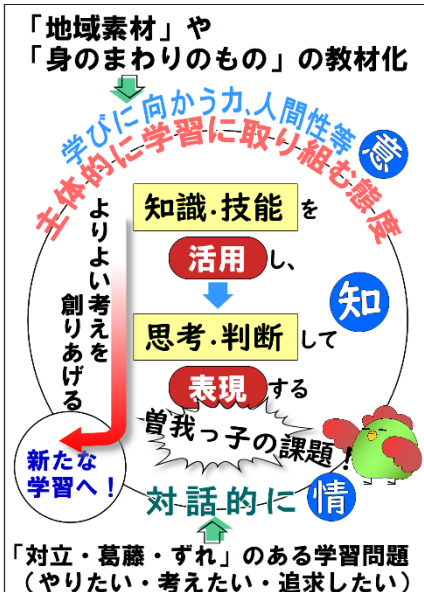
はじめに

児童が自分の生活に関わりの深い「地域素材」や「身のまわりのもの」を教材化し単元をつつていくことで、知的好奇心を喚起し、主体的な学びのある授業が展開しやすくなる……曽我小学校ではこのような仮説のもと3年間、校内研究を進めてきました。

5年生社会の「日本の伝統、米作り～曽我から学ぶ～」をはじめ、3年生は地域のみかん農家の仕事、4年生は防災倉庫の災害時備蓄品、6年生は「世界があこがれるまち小田原」を教材化し、特別支援級、1・2年生もそれぞれが大好きな身のまわりのものを活かして単元を組み立てました。

今年度は特に、身近な課題について子供たちが生き生きと話し合い、考えを深める場面が数多く見られました。また、曽我っ子の課題である表現力の高まりが感じられる場面が増えているのも3年間の成果の一つではないかと考えています。本校の取組をご覧いただき、忌憚のないご指導とご助言を賜りますようお願い申し上げます。

曽我小学校長 椿 清一



【校内研と学習指導要領】

研究の方法

1. 主体的な学びのために

①身近な教材を扱った単元計画づくり(授業研究)

子供は身近なものに興味をもちやすい。それが自分の生活に関わるものであれば、自分事として、より捉えやすくなる。このことから、「地域素材」や「身のまわりのもの」を教材化し単元計画を組んでいくことで、子供の知的好奇心を喚起し、主体的な学びのある授業が展開しやすくなると考えた。「素材の活かし方」を社会科・生活科で具体的に研究し、子供たちが「知りたい」「考えたい」とより強く感じて、自ら追究していけるような単元計画を立てることを目指す。

②主体的な活動報告会

授業研究する単元だけでなく、学校生活の様々な場面で、子供が決め、子供自身がやり遂げるといった経験を積めるようにしていく。教師の意識づけのために、また情報共有のために、どのような主体的な活動をすることができたか、年2回報告会を行う。(8月・1月)

2. 対話の充実のために

① 学習問題の設定(授業研究)

子供が「やりたい」「考えたい」「追究したい」と思うような学習問題が設定されていれば、対話も自然に充実していくと考える。つまり、子供にとって魅力的な学習問題を模索していくことが本研究において必要不可欠であると言える。自然と対話が生まれるような学習問題は、「対立」や「葛藤」、「ずれ」がある問題である。そうした学習問題を設定することで、対話の充実を図っていく。また、昨年度の反省点である「話し合いの着地点を明確にし、議論を深めることができるような手立てをとる」ことについても、研究を進めていく。

②「話す・聞く」の指導方法 情報交換会

各学年の発達段階に応じた、「話す・聞く」のスキル面での指導は、対話の充実に向けて欠かせない。どのような指導をしているのか、どんなことを大切に取り組んでいるのか、情報交換を行い、参考にし合う。(6月)

講話・ワークショップ

【地域素材発掘フィールドワーク】

5月9日、職員全員で杉崎農場へ行き、地域でみかん作りを営まれている、杉崎農場6代目杉崎翔太さんにインタビューしてきた。インタビューの内容は、「みかんの出荷先、働いている人数、みかんの貯蔵、生産者としての喜び、苦労していること」等、3年生社会科単元「農家の仕事」で扱えそうなものをお願いした。話を聞いただけでなく、実際にみかん畑へ行き、みかんの貯蔵庫、イノシシ対策の柵等も見せていただくことができた。



【単元計画づくり ワークショップ】



5月22日、3グループに分かれ、杉崎農場を地域素材とした社会科の単元計画づくりを行った。単元の始まりは「小田原の特産物はどんなものがあるかな?」「杉崎農場へ見学に行ったら」「植えてからはじめての収穫まで何年?」という切り口で、内容は「なんですぐに売らないの?」と貯蔵庫に関する疑問、「どうしてこんな坂で作るの?」おいしいみかんを作る工夫、「なぜそれほどまで大変なのに続けているの?」生産者の工夫・喜びに着目したものとなった。

【講話】横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校・上田晋太郎教諭「地域素材を生かした単元づくり」

実践紹介①『学校で1か月使っている水の量はどれくらいだろう』児童が予想していた数値をはるかに超えた事実を知らせ、数量で驚かせる。このことにより、社会を知る問いを生み出す。

実践紹介②『市でゴミを焼却できる量はどれくらいか』児童の予想と現実のずれが生じ、社会の課題を見抜く問いにつながる。「深い学びへと導いていくためには、問いを進化させていく必要がある」というお話をいただいた。



実践紹介

梅の子1組 自立活動・単元名「クイズ！これ何でしょう？」

みんなで協力したり、達成感や喜びを感じたりしながら、コミュニケーション能力を高めるために、「クイズ！これ何でしょう？」を題材に選んだ。単元を通して、異学年の子供たちが興味をもって活動することができた。箱の中身あてゲームでは、2グループに分かれて箱の中にあるものを当てるゲームをした。箱の中に入れるものは、一人一人が事前に考えて用意した。手で触った感じをペアの友達に自分なりの言葉で伝えることができていた。また、伝えることが難しい場合には、大きさ、重さ、手触りなどの例が書かれたヒントカードを使って自信をもって伝えられた児童もいた。「友達に話したい」「友達の話を知りたい」という気持ちから「みんなで考えたい！」を学ぶことができた。



梅の子2組 自立活動・単元名「集団ゲーム」

自分から周りの人に発信したり、周りの意見を受け止めたり、チームで協力したりすることを目指して、様々なゲームに段階的に取り組んだ。いろいろなゲームの中で、「楽しい」の気持ちのパワーとなって、または周りの勢いに乗って、「発信する」ことの練習になった。練習を通して、元気よく登場する声やしぐさに慣れ、「やらない」「はずかしい」を克服したりした。「電池人間」では、「助けて」とすぐに言えるようになった。自分の意見を強く出してしまふ子も、「〇〇さんは、どう？」と、発信しにくい子に促し、全員が意見を言う前から決めることが子供だけでできるようになった。また、自分とチームのみんなの意見が違う時、意見が多いほうに合わせることもできるようになった。



1年生 生活科・単元名「みんなのにこにこ大きくせん」

「にこにこ大きくせん」では、家族のために自分ができそうなことをいくつか試してみた。発見したことや成功・失敗談を互いに出し合っていく中で、「家族を『にこにこ』させることができたのかな？」と疑問が生まれた。そこで、「家族を『にこにこ』させるためにはどうしたらいいのか、みんなで考えよう。」を本時の学習問題とした。家族からの手紙には、感想やアドバイスを挙げてもらい、自分の計画と家族の願いとのずれに気付かせることをねらいとした。ずれに気付くことで、自分に対し家族が求めていることや自分も家族を支えていく一員であると自覚し、家庭内で自分ができることを増やそうとする態度の育成を目指した。



2年生 生活科・単元名「小さな友だち」

学校のプールで捕まえたヤゴの世話をした。自分があげたエサを食べる様子をみて喜んだり、生き物の変化や成長の様子に驚いたりしながら生き物への関心を高め、生き物への関わりを深めてきた。自分が発見したことを友達に知らせたり、上手なエサやりの仕方などを教えたりして、大切にヤゴを育てることができ、何匹もトンボに羽化させることに成功した。そこで、「ヤゴのかいかたブック」を作り、上手に飼うために必要なことをまとめることにした。ヤゴが過ごしやすい水槽はどんなものか、ヤゴが好きな食べ物や、エサやりのしかた、気を付けることなど載せる内容を考え話し合い、共通理解を図り、「ヤゴのかいかたブック」を作成した。



3年生 社会科・単元名「農家の仕事」

ワークショップでの学びを生かし、曾我小学校の子供たちに身近な農家である「みかん農家」にスポットライトを当てて、学習を進めた。10月末にあった「みかん狩り」では、みかんを狩ってその場で食べさせていただいたり、仕事の様子を見学・インタビューしたりした。その経験を通して子供たちから出た、「大変そうだな。」「自分には無理だな。」という言葉を生かし、「なぜ、大変なこともあるのに、みかん農家を続けているのかな。」という学習問題を設定した。話し合いの中で、「生活のため」「お金が必要だから」と生産者の生活や経済に関する視点と、生産者の生きがいや喜びに関する視点の両方に気付くことができた。単元全体を通して、自分たちの生活は、地域で働く農家の人達によって支えられていることを学んだ。



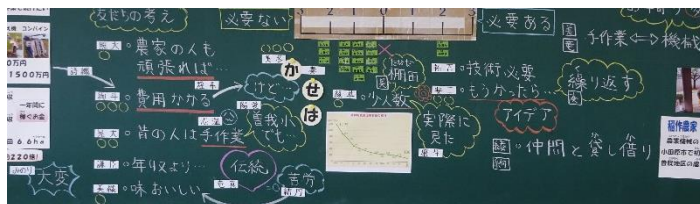
4年生 社会科・単元名「風水害にそなえる町づくり」

曾我小学校は広域避難所であり、防災倉庫が設置されている。備蓄品の数に着目した子供たちから出た、「足りるのかな。」「増やすべきかな。」「増やした方がいいのか?」という学習問題を設定した。話し合っていく過程で、増やした方が望ましいが現実的に難しさがあるということや、公助にばかり頼るのではなく、自助・共助も必要であるということに気付くことができた。単元の学習の中で、地域の住民として、小学生の自分にもできることを考え、実行することの大切さを学んだ。



5年生 社会科・単元名「日本の伝統、米作り ～曾我から学ぶ～」

学習問題「多額の費用を出してまで、農業機械を使う必要はあるのか?」を設定し、稲作農家の現状に迫った。事前に道徳学習と関連させ、稲作が日本古来の伝統文化であることを扱った。そのため、学習経験や「稲作プロジェクト」と関連させて学習問題を考える姿が見られた。また「お米メーター」を活用し、自分の考えを視覚的に示した。これにより、「友達の考えを聞きたい」「友達に考えを伝えたい」という意欲につながった。



6年生 社会科・単元名「わたしたちの暮らしを支える政治」

「小田原の良さとは?」家族に対してインタビューをすることで市の良さ、改善点、願いを確認することができた。そこで、市民の願いを叶えるためにどのような取り組みがあるのか「世界が憧れるまち“小田原”」を掲げるロードマップを基にして単元を構成した。人口減少課題には開成町の人口増加データを読み解くことで、交通の利便性の課題には茨城県境町の自動運転バス導入を検証することで、自分たちのアイデアが小田原でも実現可能か議論した。家族・現役市議会議員へのインタビュー、クロームブックで調べた市町の取り組みの背景を擦り合わせる中で、願いを叶えるためには他市町の模倣ではなく、小田原の実態把握が必要であること、市議会議員が市民の願いを叶えるために奔走していることを実感することができた。



成果と課題

<成果>

3年間の取り組みの成果が表れ、『『地域素材』や『身のまわりにあるもの』を生かし、子供たちの学習意欲を高め、主体的な学びへとつなげることができた。また、共通の体験や資料から、一人一人が自分の考えをもち、同じ土台に立って、話し合いに参加できたことも成果として挙げられる。

<課題>

「主体的」については一定の成果を得られた一方で、「対話」や「深い学び」については課題が残った。単元の中で「対立」「葛藤」「ずれ」を感じる流れを作り、「対話の必然性」を生むことが反省点として挙げられた。対話の充実のためには、資料を効果的に使い、子供たちの「考えたい」「話し合いたい」という気持ちを喚起して、話し合う価値のある学習問題を子供と共に創りあげる必要がある。また、話し合いを深めるための「教師の出どころ」についても十分検討し、適切な場面で必要に応じて舵取りをしていくことも欠かせない。こうした手立てをとることで、学びの深まりを子供たち自身が実感できると考える。

終わりに

これまでの研究をもとに、教職員一人一人が子供たちの意欲や学びの向上を目指し、学校・地域が一体となった教育活動の推進に取り組んだ1年間であったと思います。教師自ら地域に足を運び、曾我地区の特徴やよさを生かせるように教材化を図り、また、保護者や地域に向けての発表を行うことで、子供たちの表現力の向上に努めてまいりました。本研究での成果を生かし、今後も実践を積み重ねていきたいと思っています。

結びに、本校の研究推進にあたり、ご指導とご助言をいただきました横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校 上田晋太郎教諭、小田原市教育委員会 園山隆志指導主事に深く感謝申し上げます。

教頭 山田亜紀子